

先週の回答



わたしは素直さを微塵も持ち合わせていない。何でも斜(はず)にもものを見る性癖がある。したがって彼の愛句「敬愛人」も後から誰かがつけ足したのではないかと懷疑している。

彼とはかの西郷隆盛である。身長五尺九寸八分(182センチ)。体重二十九貫(108キロ)、顔は豊かな頬に眉毛は焼き海苔を貼り付けたように太く真っ黒。目玉は並外れて大きくギョロリと睨まれると誰でも竦んでしまう。

こんな頼り甲斐のある大人物は他にいないと思わせる風貌であるから、この器の大きい人物(に見える人)にギョロメ言われると、対面する者は「なるほど」「ごもつとも」と見かけに畏れ入ってしまったのではないかと、わたしは意地悪

く邪推してしまうのである。

わたしの小学校の同級生に中村くんという大企業の重役の息子で西郷隆盛にそっくりな、身長170センチ(小学校三年で)、体重80キロ、目玉ギョロリで眉毛焼き海苔がいた。

大きな体躯の中村くんは常に沈着冷静で成績も秀でていたので、みんなの尊敬を一身に集めていたが、彼の家はわたしのうちの隣りだったので、毎日家庭教師の大声で叱咤する声を耳にしていた。「こんな計算ができないのか! お前はバカか」を。

中村くんはシクシク泣きながら何度もやり直しては、また叱られていた。いわゆるウドの大木、大男総身に知恵が回りかねだったのを、わたしだけが知っていた。

それでも成績は良く、ドンくさいのも悠揚迫らずと見られてみんなから一目置かれていた。中学、高校、大学も体格と風貌はスケールを増し、中味と関係なく周りの敬意を募り、父親の力で大企業の重役になった。

ぶっちゃけた話、西郷隆盛はそれほどの人物ではなかった。たとえをいくつか挙げたいが長くなるので残念ながらやめておく。

これまで海音寺潮五郎、司馬遼太郎、池波正太郎ら多くの作家が西郷ものを書いてきたが(今年のNHKで「西郷どん」も始まったようだが)、西郷隆盛が大人物であったか眉ツバと思うのはわたしの偏見としても、隣りの中村くんちのお母さんは、これまた西郷隆盛にそっくりな、焼き海苔眉にギョロ目の顔と偉丈夫で、人並み外れたスケールの大きなご婦人であったことはまちがいない。



中村くんのお母さん

今週の問題



□の中に漢字を埋めて
四字熟語を完成させてください。